



佳作

ぼくの野きゅう人生の

はじまりだ

北九州市立永犬丸小学校 三年

林 祐輝

代打林ゆうき。一きゅう目空ぶり、ストライク。二きゅう目見送り、ボール。三きゅう目空ぶり、ストライク。四きゅう目空ぶり三しんバッターアウト。くやしかった。これがぼくのはじめての打せきだ。ぼくは、プロ野きゅうや高校野きゅうを見て、かんたんに打てると思ってた。でも、じっさいバッターボックスに立ってみて、どれだけむずかしいかよくわかった。チームメイトは、「まだ始めたばかりだから、仕方がないよ。」とはげましてくれた。うれしくて、感しゃした。そして、練

習をがんばってぜったいにうまくなろうと思った。

ぼくは、6月からクラブチームに入って野きゅうを始めた。そして、夏休みにお母さんが、「イチローも3年生の時に野きゅうを始めたみたいよ。」と言って、「イチローの少年時代」という本を教えてくれた。イチローが子どもの時どんな練習をしていたのか、とても知りたくて読んでみた。

やっぱりイチローはすごかった。まだ2年生で、野きゅうを始める前なのに、ソフトボールのし合にピッチャーで出て、みんなをおどろかせた。野きゅうを始めから、チームで活やくしてオのうがあった。読んでいくうちに、ぼくとあまりにもちがいがすぎて、うらやましくて仕方がなかった。ぼくは今までし合に、2回代打で出たことがあるけれど、どちらも三しんだった。レフトをまもって、口では「さっこーい」と言っているけど、心の中では、「ボール、来るな」と思っている。

どうしたら、ぼくも上手になれるか、読みながら考えた。まず、ドキッとしたことがある。野きゅうの上手な

子とそうでない子は、道具を大切に手入れすることでもちがいがあるといふことだ。やばい。ぼくは今、時どきしかしていない。れん習でつかれた時は、お父さんにしてもらっている。そういうことも、上手になることにかんけいがあるのか、と思った。すぐしよう。

それから、イチローは才のうがあるだけではなかった。ほかの人がしていないようなど力をしていた。毎日お父さんと二人で練習をした後、バッティングセンターに行ったり、指のあく力をつけるために、練習の行き帰りにベースばんを指ではさんで持ったり。しゅう学りょ行に、スナップボールを持って行ってきたえたりもしていた。かんとくがいつも言っている「ど力、こんじょう、にんたい」をわすれていないのだ。

ほかに、かんとくの言葉から教えてもらうことがたくさんあった。まず、「ボールをこわがらず、せつきよくてきに打ちなさい」という言葉だ。ぼくはこわがっているつもりはないけれど、どうしてもへっぴりごしになつてしまう。でも、これからはイチローみたいにボー

ルにむかっていこうと思った。それから、「まちがいをおそれないでまずやってみる。まちがいがわからなければ何も学ぶことはない」これはきつと、野きゅうい外のことでも、何でもチャレンジしなさいということだと思つた。

一つだけ、イチローとぼくのきょう通点を見つけた。

イチローもそろばんを習っていたということだ。ぼくもずっと習っている。野きゅううただけでなく、ほかのこともがんばってつづけていたのかと思うと、うれしくてぼくもゆう氣が出てきた。

夏休みの終わりに、北九州市子どもの館の、カズ館長の野きゅう教室に行った。ぼくは2年生の時から時どき行っている。カズ館長は、カズ山本という名前の元プロ野きゅうせん手で、近鉄バッファローズやふくおかダイエーホークスなどで活やくして、ゴールデングラブしやをとったせん手だ。だからぼくは、カズ館長にも、小学生の時にどんなことをしていたのか聞きたかった。それから、ぼくが小学生の時に何をしたらいい

のか、ヒントもほしかった。野きゆう教室のよやくの時に、練習の後話を聞かせてもらうようにおねがいしていた。

カズ館長は、ようち園からキャッチボールをしていて、小学生の時もいつも友達とキャッチボールをしていたそう。そして、時どきバッティングセンターに行っていたと話してくれた。ぼくは、まだ全ぜん打てないので、どうしたら打てるようになるのか聞いてみると、すぶりをたくさんするようにと言われた。野きゆう教室のバッティングれん習の時に、ぼくは「はんのうがおそい」「スウィングがおそい」と言われた。それから、「かまえている時は力をぬいて、ボールがバットに当たる時に力を入れて手を返す」と教えてもらった。そういうところもちゅういして、すぶりの練習をしようと思った。

一番聞きたかったしつ問で、「小学生の間にやっておくことで、何が一番大事だと思いますか」と聞いた。ぼくは、「体力」とか「気持ちの強さ」という返事が返ってくるかと思っていた。すると、カズ館長は、「言葉を

たくさんおぼえなさい。」と言った。考えてもいなかった返事だったので、びっくりした。「言葉をたくさん、そして深く知っていないと、相手の言っていることが理かいできないよ。日本語だけじゃなくて、えい語でも中国語でも」ぼくは、野きゆうとはかん係ない気がした。家にかえってよく考えてみた。野きゆうはチームでするスポーツだ。みんなでいろいろなこと話して、心を一つにしないといけないのかなと思った。そして、野きゆうだけではなくて、学校でも大事なことになるだろうと思った。

それからさいごに、カズ館長から、「ご飯をたくさん食べなさい」と言われた。それが、ぼくが今一ばんくるしんでいることだ。いつもはたくさん食べる。でも、れん習やし合の間に食べるお昼のべん当を、たくさん食べることができない。きつかったり、暑かったりするからだ。そして、もうやめたいと思う時がある。続ける自信がなくなる時がある。でも、少しずつ食べられるようにがんばって、できるところまで続けようと思う。

ぼくは野きゆうが上手になりたい。たくさんれん習して、チームのなか間となかよくがんばりたい。心も強くしたい。そしてイチローやカズ館長のように、野きゆうを思いっきり楽しみたい。ぼくの野きゆう人生は、まだ始まったばかりだ。